

2020 年度・2021 年度地層処分事業に係る社会的側面に関する研究

2020 年度研究実績報告書

【1】研究件名

研究件名	環境文学にみる対話のパラダイム——地層処分を話し合う〈共通語〉を求めて
研究分野	<input checked="" type="checkbox"/> 言語・文学 <input type="checkbox"/> 哲学 <input type="checkbox"/> 心理学・教育学 <input checked="" type="checkbox"/> 社会学 <input type="checkbox"/> 史学 <input type="checkbox"/> 地域研究 <input type="checkbox"/> 法学 <input type="checkbox"/> 政治学 <input type="checkbox"/> 経済学 <input type="checkbox"/> 経営学 <input checked="" type="checkbox"/> その他（アート）

【2】研究代表者

研究代表者	フリガナ ユウキ マサミ 氏名 結城 正美	所属機関における職名 教授
	所属機関及び所属部局 青山学院大学・文学部・英米文学科	
	専門分野： 環境文学、アメリカ文学	

【3】研究計画の概要

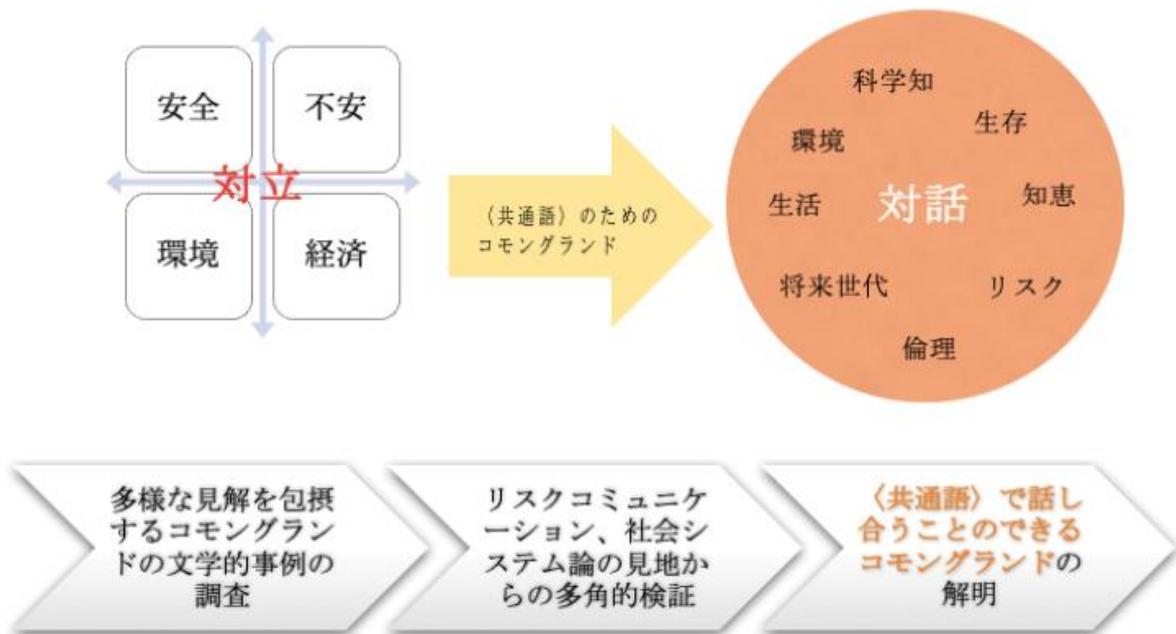
本研究課題「環境文学にみる対話のパラダイム：地層処分を話し合う〈共通語〉を求めて」は、地層処分をめぐって立場や見解の異なる人々が対話を行うためには、**多様な見解を多様なままに包摂する〈共通語〉**が必要であるという認識に立ち、そうした〈共通語〉の共有を可能にする**対話のコモンランド**を明らかにすることを目指すものである。この場合の〈共通語〉は、言語に限定されるわけではなく、納得のいくまで話し合う場の創出を促す**イメージや雰囲気**も関連するであろう。本研究では、文学、アート、リスクコミュニケーション、社会システム論の知を結集し、地層処分を話し合う〈共通語〉のかたちを**学際的に考察**する。

原発事故や放射性廃棄物最終処分をめぐる問題は、対話が求められるにもかかわらず、現実には対立が深まる傾向がある。**対立を乗り越えて対話を実現するためには、ある種のパラダイムシフトが求められる**。文学を通して環境問題をめぐる議論にパラダイムシフトが生じたという事実を鑑み、本研究は、地層処分の問題に文学的見地から取り組み、**文学を手がかりに対話のコモンランドを探る**。

この目的を達成するために、文学実践、リスクコミュニケーション、社会システム論、アートの見地から地層処分やリスクの問題に取り組んでいる研究協力者から専門的知識の提供を受け、多角的かつ学際的に対話のコモンランドの考察を進める。具体的には、**研究の各段階において研究会合**を開き、研究の点検（必要に応じて修正）を行い、各研究協力者から専門的知識の提供を受け、文学にみる対話のコモンランドの探求を多角的に発展させる。

また、放射性廃棄物最終処分に関する問題は、人間の活動が地球環境に限なく及んでいるとする〈人新世〉を象徴するものであり、地層処分の対話においても、**科学技術と地球環境の関係を人新世の文脈で考察**する視点が求められる。人新世に関する人文的議論は英語圏で極めて活発に展開しているので、環境人文学の国際学術会議（注）に参加して最新の研究を調査し、**人新世の文脈で地層処分を話し合うための素地**を探求する。

注：コロナ禍により参加する国際会議に変更が生じた。申請時は、世界中の環境人文学者が集う Association for the Study of Literature and Environment (ASLE)の大会を想定していたが、オンライン開催内容を精査し、2021年7月開催予定のノルウェー研究評議会研究助成プロジェクト ANEST のワークショップに参加する予定である。



【4】研究実績の概要

対話はディスカッションとはちがって異なる価値観をもつ人びとの話し合いであるという大前提のもと、一元的な価値観にもとづくものではなく多様な見解を多様なままに包摂しうる対話の〈共通語〉を検討してきた。

具体的には、異なる価値観をもつ人々が納得のいくまで考え話し合うことのできる場（コモンランド）について、研究協力者との研究会合で議論を深めてきた。研究協力者の宮本佳明から「地層処分においてアートにできること」、北村正晴から「地層処分問題に関する論点の捉え方」、田ロランディから「原子力時代における文学と芸術」、大澤善信から「ルーマンの諸論と地層処分の対話」をテーマに専門的知識の提供を受け、それらを研究代表者が収集している文学的・芸術的事例とあわせて考察し、地層処分をめぐる対話のあり方を多角的に検討した。

現段階では、地層処分について対話が可能になるためには以下の点を考慮する必要があることが明らかになった。

- 対話の言葉に関する意識の向上

対話活動では往々にして合理的な言葉が前面に出て、そうした言葉とは疎遠な人びとが声を上げにくい状況がある。理路整然と見解や心境を伝えることの難しい人びとに配慮し、合理的・分析的な言語だけでなく、逸話や個人的な話という形で表出しうる見解にも注意を向ける必要がある。

- 対話の文化的側面の把握

地層処分事業を進めているスウェーデンでは、処分地決定に際して住人との対話が重要な役割を果たしており、日本もその例にしたがっているが、文化的社会的な相違を考慮する必要がある。スウェーデンでは政府への信頼度が高く、また試行錯誤を許容する文化的土壌があるが、それらが日本に当てはまるとは言えない。その点を念頭において、日本で対話が成立しうる共通語およびコモンランドを検討している。

【5】 現在までの進捗状況

区分	おおむね順調に進展している。
理由	<p>【4】で述べた研究会合（オンライン開催）を通して研究協力者から地層処分の対話をめぐる専門的知見の提供を受け、アート（建築）、リスクコミュニケーション、ナラティブ・物語、社会システム論の視点を取り入れながら対話の〈共通語〉の考察を進めており、研究は概ね計画通りに進んでいる。</p> <p>多様な見解を多様なままに包摂する〈共通語〉の文学的事例を収集し考察している途上であるが、検討対象とする文学作品は地層処分をテーマとするものに限定していない（そもそもそのような作品は少ない）。地層処分と関連する原発や核の問題をテーマとする文学作品や、公害問題をめぐる文学作品を調べ、対話の〈共通語〉やコモングランドを示していると考えられる事例を収集している。現時点では、石牟礼道子『苦海浄土——わが水俣病』（1969年）、灰谷健次郎『兎の眼』（1974年）、スヴェトラナ・アレクシエーヴィッチ『チェルノブイリの祈り』（完全版原文2016年、邦訳2021年）をはじめとする国内外の作品に、対立を受け入れながら対立的言語とは明確に異なる視野の広い言葉を突き止め、その分析に着手している。</p> <p>研究を進める過程で、NUMOの対話活動について疑問も生じてきた。NUMOは「対話活動計画」https://www.numo.or.jp/about_numo/taiwaplan/において、「放射性廃棄物の最終処分は、原子力発電の利益を享受した現世代の責任で、原子力発電の今後のあり方とは切り離して取り組まなければならない」という点を訴求しているが、スウェーデンの例に明らかなように、地層処分問題は原発政策とセットで考えられてはじめて現実的な対話が期待できる。原発政策と切り離れた形で地層処分について語り合うことは可能なのか、その点を含めて、NUMOの考える対話活動について直接NUMOに訊く機会を持ちたいと考えている。</p>

【6】今後の研究の推進方策

研究実績の概要で述べたように、地層処分をめぐる対話を促す上で、(1)対話の言葉に関する意識の向上と、(2)対話の文化的側面の把握が必要であることが現段階で明らかになっている。今年度は、その二点について、文学・文化表象を含む事例研究を通して理論的分析を行う。

具体的には、研究代表者が収集してきた（今後の収集分も含む）事例の分析を、研究協力者の知見を引き続き参考にしてリスクコミュニケーション論、社会システム論、空間言語といった視点から深める。なおかつケヴィン・リンチをはじめとする廃棄をめぐる態度の理論的分析も参照して多角的分析を目指す。後者の廃棄論を参照枠とした分析に関しては、2021年4月に、青山学院大学 AGU 環境人文学フォーラムで研究発表を行った。

Nuclear culture や nuclear narrative に関しては欧米の環境人文学で研究が進んでいる、最新の知見を学ぶと同時に本研究へのフィードバックを得るために、2021年7月上旬に開催予定の国際ワークショップ（ノルウェー研究評議会研究助成プロジェクト ANEST 主催）、8月上旬に開催予定の環境人文学学術会議（スウェーデン王立工科大学環境人文学ラボ主催）で報告する予定である。ワークショップならびに学術会議で本研究に関してフィードバックを得た後、論文としてさらに発展させる予定である。

研究報告や論文は専門家を対象とし、研究者間での議論を深める上で重要であるが、地層処分をめぐる対話というテーマは、学术界の外部でこそ話し合われるものであろう。したがって、学术界を超えて研究成果を発信する手立ても考えなければならない。一般読者が手に取りやすいエッセイやウェブサイトなど、発信方法を検討する。

【7】研究発表

(雑誌論文) 計 0 件 (うち査読付論文 0 件 / うち国際共著 0 件 / うちオープンアクセス 0 件)

該当無し

(学会発表) 計 0 件 (うち招待講演 0 件 / うち国際学会 0 件)

該当無し

(図書) 計 0 件

著者名、出版社名、書名、発行年 (西暦) 及び総ページ数 (共著の場合は最初と最後の頁) を記入してください。

該当無し

【8】備考

1. 結城正美「エコクリティシズムのアクチュアリティ」*More-Than-Human* Vol. 1
<https://ekrits.jp/2020/07/3717/> (インタビューで地層処分の対話問題に言及)
2. 結城正美「廃棄と祈り」AGU 環境人文学フォーラム (青山学院大学)、2021 年 4 月 17 日 (研究報告)

以上